

結局自由に余地を与えない結果となる。最後にアーレントは、アウグスティヌスのいう時間的存在として人間が生まれる事実に、新しく始める能力の根拠を示して本書を結ぶ。以上のようにアーレントは、永劫回帰、進歩、歴史法則、存在の歴史、普遍的必然、宿命など全体主義の思想の各局面を暴きながら、それと対決する精神の生活を意志に求めるという独創的かつ必死の作業をなしているが、さらにカントの三批判に従って普遍と特殊を媒介する「判断論」によって自らの思索の完成を企図していたのである。

いずれにせよ、意志論を単に英米流の行為論の次元のみでなく、現代に反全体主義の分脈で、哲学思考の活動の核心的意義と危機を主題化しつつよみがえらせた見事な考究に驚嘆せざるをえない。

最後に本邦訳書は、様々な誤解や難解な表現も含むので座右に英語原書をおきながら読まれることをお勧めしたい。

---

谷 隆一郎 著

『アウグスティヌスの哲学——「神の似像」の探究』

創文社，1994年，vii+429+10頁。

荻 野 弘 之

本書は『三位一体論』を中心に十年余に及ぶ著者のアウグスティヌス研究の成果である。初出誌の記載は省かれているが、(九州大学文学部『哲学年報』を主とする)既発表論文(第4章「時間と志向」、第5章「悪の問題」、第9章「創造と原罪との問題」、第10章「信の構造」、第11章「「神の似像」の知と再形成とをめぐって」)に加筆し、それにはほぼ等量の書き下ろし部分を新たに加えた力作である。アウグスティヌスの『三位一体論』が中世の神学的思弁に決定的な影響を与え、また現代思想の諸潮流にあってもなお尽きざる発想と刺戟の源泉となってきた事情は今更言うまでもないが、同時にその方法は、三位一体の教義形成史の中でも空前絶後の極めて異色のアプローチであった。昨今わが国の内外でも優れた個別研究は決して少なくない。だが、長大で複雑なテキストに密着し、それを一貫した独自の展望の下にまとめあげた点で、本

書はこの分野における里程碑となる研究であり、しかも通常の「研究対象」に留まらぬ著者の透徹した求道的思索に裏打ちされて、単純な当否の批判を許さない、何か孤高の輝きを宿した作品でもある。

本書は二部から成る。すなわち第一部「自己存在の探究」においては、初期著作と『告白』を題材に、各章ごとに回心、确实性、記憶、時間、悪などの主題をめぐるアウグスティヌスの探究の基本構図を見定め、さらにその問題を第二部「神の似象の探究」において、『三位一体論』後半部（7-14 卷）の展開の文脈に即して、改めて確かめつつ吟味を加えていくという手法を採っている。こうした、いわば同心円的な二重の構成そのものが、著者のアウグスティヌス理解の方法と特質とをおのずから示しており、叙述に複線的な幅を与えるのに成功している。

さて、この標題からも窺われるように、本書はアウグスティヌスを徹底した「探究者」として理解する視点に貫かれている。それは言い換えれば、教父アウグスティヌスのある特定の思想や教説の主唱者として描き出し、その結果として、中世哲学史やキリスト教教理史の地図に上手にはめ込むことを意識的に斥ける態度を意味している。まして『三位一体論』に関する膨大な解釈史の整理批評や、内外の文献学的注釈などは、ほとんど初めから本書の関心の外にある。以下、本書の基本的な論点の幾つかに言及し、その特質と含意とを評定してみたい。

「神と魂とを知りたい」(*Soliloquia* I. 2. 7) とは、初期以来、アウグスティヌスの根本志向を表した標語として夙によく知られているが、この二つの語は、何か異なる二つの認識対象なり領域なりが独立に併存する事態を示しているのでは決してない。むしろ「魂」（すなわち、私＝自己）とは、いかなる対象的規定性を与えうるものではなく、平板な（形相的）本質規定を絶えず拒否し超克する事態としてその都度新たに問題化されなければならない。「私の存在」とは、自らを知り、（またそのことと表裏一体をなしつつ）自らを愛するという自己還帰的構造をもった「精神」であるが、それはまさしく「存在そのもの」の名である神が宿り、顕現してくる「器」であり「場」であるという根本構造に支えられているためだと著者は言う。自己とはそのような存在の宿る「かたち」として見出されることにより、神探究が自己探究と内的な結びつきを得るのである。

このような超出の動的構造のもとに定位された自己理解と探究のあり方を、著者はヘブライズムの存在体験がギリシア的思想表現を得て成立した「存在論的ダイナミズ

ム」と称して、教父哲学の伝統の中軸に据えている。従ってそこでは、創造、原罪と救済、歴史の完成といった聖書の記事も、もはや何か時間的な一事件・事実であったり、逆にまた単なる民族の神話であるにとどまらず、「人間＝神の似像」の機微を根本から照らし出す道標へと変貌してくる。すなわち、人間が神の似像であるとは、それ自体で完結した静止的構造ではなく、全能者を転倒した仕方でも倣する（ことで誰しもが根源的に「罪」に晒されている）願望や欲求が、絶えざる回心という否定的契機を通じて、失われた全体、おのれの本源の像へと再形成される過程、その意味での「不断の創造」を意味しているのである。

さらにこうした基本理解との関連で注目されるのは、「魂の志向的自己超出的な私たち」が他ならぬ「信」と呼ばれて、単に特殊な信念集団が共有する教条（*ea quae creduntur*, *De Trinitate* XIII. 2. 5）や、知識論を構成する意味での中立的な「思いなし」とは区別されている点であろう。それは新プラトン主義に接近しつつ、逆に真理の直視不可能性が痛切に自覚された地点（第8巻）で、改めて積極的な意味を担うに至る（p. 79）人間の普遍的条件であった。かくして「信」は能動的な探究の端緒を準備しつつ、また超出のもつ受動的側面をも示してやまないのである。

このような『三位一体論』の理解は、その必然的な帰結として、哲学と神学、あるいは哲学と宗教との、通常の意味での境界を融融させ、哲学の射程の大きな変貌を告げているように思われる。まさしく本書はすぐれた意味での「教父哲学」の可能性を問う試みであろう。評者は、個々の論点の当否や用語の選択、叙述のスタイルは別として、こうした教父哲学の可能性を探ろうとする著者の姿勢に対して深い敬意と全面的な共感の念を禁じえない。再説すれば、著者の構想するアウグスティヌスの「哲学」とは、三位一体の問題を、一定の完結した教説や思想として平板に描くのではなく、錯綜した探究過程そのものに潜む意味を探ろうとする試みであった。それは、問題を一定の方法的観点から思想史・教理史的に整理してみせたり、神学と区別された哲学的議論のうちから、現象学・解釈学・言語分析など現代の哲学的手法になじむ要素を抜き出したりする操作とは全く無縁の「哲学」なのである。

実際、『三位一体論』の長大な本文に真剣に取組んだ読者であれば、そこに執拗なまでの多角的な探究と挫折、迂回と反復を含んだ思索のうねりを感じて、ともすれば船酔いに似た気分さえ味わうに違いない。事実、アウグスティヌス自身もなお訂正すべき余地が多い点をはっきり自覚していたようである（*Epistula* 174, *Retractationes*

2. 15). だが、著者はこうした成立事情にもかかわらず、いやむしろそれゆえにこそ、アウグスティヌスの探究的思索の道程を、「註解の試み」と称して徹底してその内側から理解しようと努める (p. 406). 従って本書を読んで感ずるある種の難解さ、反復やうねりは、まさにそのまま著者がアウグスティヌスの歩みとの共鳴を強く志向していることも一因であろう。雲間に隠れたままの山頂を望む著者の視線はあくまで遠く、その文体は躊躇と確信をはらみつつ、なお明晰である。

評者はかつて第4章「時間と志向」発表当時 (83年3月) 強い感銘を受けて以来、数少ない同行の道の灯として、著者の一連の論考から多くの示唆を得てきた。この章は本書中で最も執筆時期が古いせいもあってか、文体の面でも他の章とやや趣を異にするが、時間論をこうした全体の探究の文脈において再読するとき、アウグスティヌスの思索のもつ射程の長さを改めて痛感させられた。また著者の意図が最も見やすいのは、これまた早い時期に書かれた巻末の第11章 (85年3月初出) であるように思われる。

「あとがき」によれば、著者は当初『教父の哲学——アウグスティヌスとニュッサのグレゴリオス』という一書を構想していたという。たしかに「動的なかたち」「自己超出としての構造としての信」といった本書に頻出する独自の表現は、東西教父に、その措辞の違いを超えて通底する「同根源的な構造」を取り出そうとする志向に裏打ちされている。何よりも「エベクタシス」と特徴づけられるニュッサのグレゴリオスの影が強く感じられるのである。ただ、一方で同根源性を強調するだけでなく、東西の肌合いの微妙な相違をも見落とすべきでなく、その意味でも特に『三位一体論』前半部分 (1-7巻) の全巻への位置づけ、および第15巻の聖霊論のもつ意味についても尋ねてみたい。しかしそれは本書がすでに十分自覚した上であえて触れなかった部分であり、すでに「ないものねだり」の領域であろうか。あるいは「教理史」という、哲学とはまた違った巨大な森の中に踏み入らなければ果たせぬ作業なのかも知れない。次作を期待する所以である。

こうした性格の本書にとって巻末の事項索引はあまり意味をもたない。むしろ聖書とアウグスティヌス著作への出典箇所 (Index locorum) を付した方が、索引として有効に機能しうるのではないかと思う。

なお本書については、管見の限り昨年すでに片柳栄一 (『創文』357号, 1994年8月)、八木雄二 (Epistolae 17号, 1994年6月) 両氏による書評と紹介があり、宮本

久雄『宗教言語の可能性』（勁草書房，1992年）第4章が，本書第6章の内容と，また評者自身の拙稿「アウグスティヌスにおける自己知の両義性——『三位一体論』第十巻を中心に」（上智大学『哲学科紀要』第20号，1994年3月）が，本書第6-7章の主題と，それぞれ密接に関係する論考である。